

アットホーム、に思いきり一体感を楽しむ

はざまゆか鍵盤八モニカコンサートinすわか文化村



10.17コンサートは、シャンデリアとじゅうたんに包まれた「豪華」なホールで催されました。会場は、野の花を飾り大判の織物で覆われた6人くらいずつのテーブルが5個、聴衆と同じフロアでその目の前でゆかさんとピアノの福嶋るみさんがぴったりの呼吸で奏でる、というアットホームな雰囲気、30名がおもいきり楽しみました。

クラシックからラテン・ジャズ・映画ミュージックまで、身体と楽器がひとつになった演奏、八モニカとピアノの呼吸ぴったりの演奏。そして、お茶・お菓子をいただきながらのたっぷりの「幕間」での、参加者とゆかさんとのささやかな質疑交流。ラストは、終始いい子で聞いていた子どもさん二人からお二人への「花束贈呈」、更には後片付け後の会場での主催者とのほんの僅かな交流・・・最初から最後までたっぷり楽しんだ私でした。

とりわけ、私が感動したのは、ゆかさんの言葉　ピアノを弾くときと違って、鍵盤八モニカ(大型ピアノ)の場合は、聴衆の顔や雰囲気をしながら演奏できる、そうすると、聴衆と一体になれる。その魅力から私はこの鍵八モに生涯？打込みたいーでした。演劇主催団体である市民劇場でよく話し合われるなかに、「舞台と客席とのせめぎあいのなかで最高のお芝居ができる」というテーマがあります。観客は決してただ一方的に受け身ではなく、観客と舞台との行ったり来たりするせめぎあいのなかで、盛り上がった芝居が生まれ、それをまた盛り上がった観客が大いに感動を持って受けとめる。私は、岡谷では会員制市民劇場でお芝居を楽しむとともに、都会の劇場でも機会があればお芝居を観るように努めていますが、これが同じ劇団の同じ演劇かと思うくらい、盛り上がり方がまるで違う、市民劇場での盛り上がり方がいつも格段にすごいのです。

この実感があるために、「本当に聴衆と一体になって楽しみたい、それがまた聴衆への最高のプレゼント」とのゆかさんの気持ちが少しは分かるのです。これは、ゆかさんの哲学です。事前にDVDを観た時に、不思議な一体感＝繋がり感を覚えていたのですが、この哲学が、その繋がり感を生み育てていたのです。まさに、この日の演奏で、最高の繋がり感を得た私でした。この企画を発案した文化村理事の手塚さんが、理事会で「ゆかさんに会えば、毛利さんはきっと、ゆかさんを大好きになる」と言ったので、即座に「これで行きましょう」と決めた私でしたが、その「期待」が成就して幸せでした。聴衆からみても、鍵ハモがほとんどの人が子どもの頃に弾いたことがあるピアノの大人版ですので、自分も弾けるかもという演奏者に対する親近感が沸いています。これも、繋がり感を醸し出しているのでしょう。参加者も、口々に「よかった」「いい企画だった」とのことでした。(すわこ文化村代表理事 毛利正道)



演奏曲目

くまばちの飛行・シチリアーノ～バディネリ・口笛吹きと犬・ねこバス(となりのトトロ)・ヴォカリース・ダンツァ踊り・青春の輝き・ティコティコ・サンライズサンセット(屋根の上のヴァイオリン弾き)・映画「シンドラーのリスト」メインテーマ・虹の彼方に(オズの魔法使い)・チャルダッシュ

感想

- ・鍵盤ハモニカの世界に触れることが出来て良い企画だったと思います。音色は、アコーディオンを思わせますね。ゆったりとしたメロディの演奏が特に好きでした。楽器が歌っているように心に響きました。(文化村村民 女性)
- ・始めて聞きましたが、なんだか自分でもやれそうな親しみを感じました。楽器屋さんに行ってみよう。荒城の月、もみじなどの(誰もがなじんでいる)曲も組み合わせていただければもっと良かったと思います。
- ・大変良かった(今回が2回目)。まだ一般大衆に認知されていないのが残念である(1940年生まれ男性)
- ・曲などの説明も分かりやすくして下さり、ききながら勉強になりました。(1968年生まれ女性)

